

世界第一の女流バイオリニスト

カスリン・パーロウ女史
バイオリン大演奏會

拾月

十四日(土) 曜日
十五日(日) 曜日
十六日(月) 曜日
十七日(火) 祭日

毎日午後一時開演四日間限り

但し十六日は社會奉仕半額デーとす

拾四日曲目

一、司伴樂、第四、短に調、作品卅一、ビュータン作曲

アンダンテ、アダージオ・レリシオソ、終曲マルツイアレ、

二、ソナタ、惡魔のトリル

タルテイーニ作曲

三、(イ)ヘブリユープレイヤー

アクロン作曲

(ロ)ロンド

モツアルト作曲

(ハ)ラ・ギタナ(十八世紀のスペイン)
シジプシの歌

クライスラー作曲

(ニ)班牙利亞舞曲

ブラムース・ヨアヒム作曲

四、(イ)インディア・ラメント

ドボルジャツク作曲

拾六日曲目

一、司伴樂、長に調、

アレグロ・マエストロソ

パガニーニ作曲

二、シヤコンヌ、モルト・モデラート

ヴァイタリ作曲

三、(イ)ローマンス

ベートーベン作曲

(ロ)主題及び替手曲

タルテイーニ作曲

(ハ)太陽への讃歌(金鶏)

リムスキー・コルサコフ作曲

(ニ)モルト・ベルベトウオ

フランク、ブリッヂ作曲

は倫敦でエルマン氏と會つたので、直に決心して露都ペトログラードに走り、名匠レオポルド・アウアーの門弟となり、勉勵亦勉勵、遂に、千九百〇八年に、完成せる藝術家として、露都に初演奏を爲した。それから。スカンジナビア、獨逸、和蘭土、白耳義を歴訪、更に千九百十年十一年の第一回米國演奏旅行に、非常なる名聲を博し、第二回米國演奏旅行(十一年十二年)には、ホストンシンフォニーオーケストラの獨奏者として、十三回出演せる如き絶大の名譽を荷つたのである。亦、クリスチアニアでは、ノールエー皇后陛下の御前演奏を命ぜられ、陛下から立派なプローチを下賜されて居る。女史の持つてゐるバイオリンは、諸威のある富豪から贈られたもので、立派な「ガルネリユース」である。而して今やパロウ女史は、絶體に世界一の女流バイオリニストで、其の奏法の勇健全く、「音樂の化神かと思はる、斗り」とは、クレービエル氏の批評なり。



THEODORE FLINT

伴奏家フリント氏

□パロウ女史の伴奏者セオドル・フリント氏は、此の大戦中は、英國皇帝の勅命に依つて、戦地慰問樂團の一員として、光榮ある使命を果した洋琴家で、亦、有名なるメルバ女史ア

ル女史の伴奏を爲して居た人であるから、履歴としては缺くる所なき英國紳士である。今や此の兩者同伴日本郵船の丹波丸で來朝した。諸君は、同女史の名を記憶せられ、絶大の御後援を玉はりたい。而して千歳の一偶を逸する事なく其の妙技に酔はれたいものである。

KATHLEEN PARLOW



世界第一の女流バリオリニスト

カスリーン・パーロウ女史の來朝

□ 本月東京、横濱、名古屋、京都、大阪、神戸に演奏 □

□ 今秋の日本の樂壇は、祝福されて居る。即ち十月には、英國の大提琴家、カスリーン・パーロウ女史が、伴奏として、セオドル・フリント氏を伴つて來朝した事である。

□ パーロウ女史は、一八九〇年九月廿日、加奈陀のカルガリーに生れた。而して、五歳の時彼女の家族は桑港に移轉したので、桑港へ行き、其處でバイオリンの稽古を始めたのだ。而して、スポーアの弟子のヘンリー・ホルムスについて非常の發達を爲し、千九百五年、其々に倫敦に來り、倫敦シンフォニーオーケストラの伴奏で、初演奏を行つた、而して、其年の七月アレサンドラ女王の御前演奏を命ぜられて、大層な面目を施した。それが女史の十五歳の時である。其の翌年女史

